

## 「内地」に行けなかった人々

—ある上海青年の「焦慮」と「解放」(1942～1945)—

劉 韻 琿

### はじめに

第二次上海事変(1938年)後、上海の新聞・雑誌は、内地に都市青年を動員するため、「到内地去(内地に行こう)」のスローガンを盛んに喧伝した。このようななか、都市青年はこのスローガンをどのように受け止め、解釈実践し、その意味とは何だったか。また、それを受け止めるプロセスのなかで「内地」イメージはいかに再生産されたのだろうか。本研究では、顔濱という上海青年の日記を取り上げ、彼に記された「内地」をめぐる言説を分析することを通して、上述した問題を考える。

上海に残った人々については、古厩忠夫が先駆的な研究を行っている。古厩忠夫は上海「残留者」を①抗日救国の活動をしようとした人々、②民族ブルジョアジー、③残された多数の人々、④様々なレベルで日本に協力した人々、の四つに分類した。このうち③は、どこにも行き場がないが故に上海に留まり続けたり、あるいは留まらざるを得なかった人々である。老人・子供・女性等の上海住民の大多数と、戦火に見舞われて上海に流入してきた避難民たちを指す<sup>1</sup>。だがこのような分類は、上海「残留者」を上海に「残る」というより、「残らざるを得ない」、離れようとしても離れられない人々として位置づけようとする傾向が見られる。そこには、「残留」という行為の正当性を強調する、つまり戦時・戦後における占領地上海に生きた一般人への苛酷な道徳的非難を是正するというねらいがあるかのように思われる。しかし本研究で取り上げる青年は、「残留者」でありながら上述した人々に属さない。彼の日記を分析することで、上海を離れる可能性を有する一方、「それでも上海を離れなかった」有志青年の内面的葛藤を垣間見ることができるであろう。

このような経験は日記という媒介によって記されたのである。2015年、日本の占領下にあった上海での日々の暮らしを綴った一人の青年の日記が出版された。顔濱(1923年～?)の日記である。浙江省寧波市洪塘に生まれた顔濱は、幼くして母を亡くし、14歳の時(1937年1月)に姉に連れられて上海に移り住んだ。

そして中学校卒業後、同郷の胡次橋が営む金物屋「元泰」の職人となった。顔濱は1942年（当時19歳）に日記を書き始め、戦後の1960年代までそれを続けた。その日記が2015年に采金という歴史愛好家によってまとめられ、日記集『我的上海淪陷生活』として出版された。同書には1942年から1945年までの日記が収録（1943年分は紛失）されており、その総字数は約40万字に上る。

社会的記憶の重要な担い手として、どのような個人的な記述であっても、一定程度の「社会的」痕跡を避けられず<sup>2</sup>、日記も例外ではない。しかし、政党や社会団体の刊行物、あるいは新聞・雑誌などの公の記録とは異なり、個人の日記は生活に対する「複製的」な記述で、生活を再現する一定程度の「客観性」を持つと考えられる一方、その表現の形は公の記録より多元的であるように考えられる<sup>3</sup>。顔濱日記では、彼は日記で「内地に行こう」というスローガンに何度か言及しながら、公の記録と異なった「下からの視点」から個人レベルの内地への憧れや上海「残留者」の精神的苦境を綴った。

以上のように本研究では、「内地に行こう」というスローガンが生まれた時代背景を整理し、「内地イメージ」の創出と変容について考察したい。そのため、顔濱日記においてこのスローガンが登場する箇所を拾い上げ、そこに記された顔濱の言葉を分析する。そこで顔濱が計画した「内地行」の経緯に着目し、政治的スローガンとその実践を分析することで、日本占領下における政治と日常生活の相互浸透の実態に迫ってみたい。

## 第1節 内地に行く

### 1. 内遷の背景

1937年8月、第二次上海事変が勃発し、その後11月までの間に全ての中国軍が上海から撤退し、国民政府が南京から重慶へ移った。激変のなか12月16日、すでに重慶に内遷していた蒋介石は「南京陥落の為に全国同胞に告げる書」を發布し、「中国の持久抗戦において、最後の決勝の中心は、南京にあらず、各大都市にあらず、全国の農村にあるのであり、広大で強固な民心に寄せられるのである<sup>4</sup>」とし、農村を主とする中国の内地に対して戦略上の配慮を示した。しかし、蒋介石の期待とは裏腹に、内地農民のほとんどは戦争や政権に「無関心」であった。長征中に中国南方でのゲリラ戦の経験を有する陳毅は、1937年の文章「いかに内地での救国運動を展開するか」で、内地の農民にとって抗日・救国は対岸の火事だったと指摘した<sup>5</sup>。それは、当時内地で現地調査を行った共産党員の柳乃夫（異名趙宗麟）の報告書にも表れている。以下一部引用する。

一般農民は上海での抗日戦争をまるで知らなかったかのようだ。彼らは『東洋鬼子』を殺したいと叫んでいるだけだ。敵がどのように我々を蹂躪しているか、我々がいかにして敵を打ち負かすべきかについて、彼らは全く分かっていない。日本軍の空襲を受けて、実際の被害を受けたことのある農民だけが後方支援の工作に参加する。それ以外の人は今回の戦争に対して、理解がまだ不十分だ<sup>6</sup>。

こうした状況から、「内地工作」の重点は農民を動員し、彼らを抗日・救国の支援工作に参加させることとなった。「内地工作」の具体的な内容について、1937年に出版された石礎の『いかに内地工作を行うか』には以下のように書かれている。

当面の任務は、今回の戦争はこれまでの内戦と全く違う、ということを農民に理解してもらうことである。つまり、農民に対して宣伝、組織と動員を行うことである。宣伝の面では、各郷・村で講演会を開き、役場・小学校・祠で標語、漫画、壁新聞を作り、防空・防毒教育を宣伝し、歌・演劇の形で農民を啓発すること。組織の面では、戦時民衆識字班、常識訓練班、歌唱班と新劇班を設立する、定期的に戦時座談会を開催すること。動員の面では、防衛団、野戦服務団を編成し、後方支援を充実させる<sup>7</sup>。

民衆の政治参加への土壌が不十分であるという問題を解決し、内地工作を迅速に展開するには、ヒト・モノ・カネの内遷、特に都市知識人の内遷が喫緊の課題となった。会社、工場、大学をはじめ、武漢、重慶、昆明、貴陽、桂林といった中国西南部を目的地としたさまざまな地域間移動がはじまった。

## 2. 上海における青年動員

顔濱という上海青年は、1937年1月に寧波から上海のフランス租界にやって来た。数カ月後、上海でも「内地に行こう」という運動が展開された。最初に移動したのは党・政・軍の関係者であった。彼らは日本軍に利用されないため、自発的あるいは受動的に上海を離れ、重慶へ赴いた。それに比べて、一般市民においては態度が二分され、上海を離れる人と離れない人、それぞれに考えがあった。当時上海在住の医者陳存仁の回想録によると、一部の市民は日本軍の租界侵入を懸念し、杭州経由で国民党の支配地域「国統区（国民党統治区）」に逃げた。それ以外の市民は租界の庇護を信用し、引き続き上海に残るほうが安全であると考えた。その結果、二、三十万人が上海を離れた一方、四百万人以上が上海に残った<sup>8</sup>。

このような移動とほぼ同時進行したのは、1938～1939年の上海で行われた「内地に行こう」というキャンペーンであった。上海の各救国会や戦地服務団といった抵抗的団体が内地に派遣された。その中には学生や知識人で構成された団体もあり、青年はこのような団体の動員対象である。例えば、青年救国服務団という組織がある。メンバーは2000人で、各界の青年を動員して戦時服務に身を投じさせることを目的としている。それに応じて、上海の新聞・雑誌が「内地に行こう」と呼びかける動きを始めた。上海は中国における報道や出版の中心であり、上海租界が「孤島」になる前夜まで、多様な背景や観点を有する新聞や雑誌が各種発行されていた。それら全てが抗日という旗幟の下に集結し、強大な宣伝陣営を構え、全国の抗日宣伝の中心となっていた<sup>9</sup>ため、このスローガンの流行は上海の定期刊行物の展開とも関わっている。多くの新聞・雑誌は租界の中立的な政治環境を利用し、抗日・救国の思想を宣伝していた。その中で最も影響力を持った新聞『申報』紙上において、「内地に行こう」をテーマにした宣伝や動員の記事が数多く見られる。その量や分布から見ると、1938年と1939年が最も頻繁に現れる時期である。特に1939年は、「内地に行こう」をめぐる討論が80件でピークに達しており、当時の雰囲気の様子盛り上がり伝わってくる。例えば、1938年10月14日付『申報』の「到内地去」と題した記事は、「孤島」上海にいる青年たちに銃後に赴き、内地工作に参加することを勧め、前線の兵士を支援しようと呼びかけている。内容は以下のようなものである。

「内地に行こう！」とは、最近の「孤島」上海において最も流行しているスローガンであろう。いや、それは単にスローガンではなく、「孤島」にいるあらゆる青年が持つべき志願である。前線の兵士は血を浴びて奮戦している一方、充実した後方支援も不可欠である。そのため、当局は青年たちに内地に行くことを呼びかけている。「孤島」の苦境に陥る多くの青年は安逸な生活を諦め、惨めな戦地の生活を喜んで受け入れた<sup>10</sup>。

これらの呼びかけの対象は「孤島の有志青年」であり、その内容には、現状に慣れ安穏な暮らしをしている青年を目覚めさせたいというのが多数見られる。また、様々な新聞・雑誌に内地に関する情報が掲載されるなか、「内地」という言葉そのものを雑誌の名称に用いたもの専門誌も生まれた。1938年12月創刊で月2回発行された『内地』は、この動員に応じて作り出された専門誌であると考えられる。創刊号の表紙には「内地に関する正確なニュースを報道し、読者にこの時代の知識を与える」と書かれており、創刊の辞には、「国民党政府はすでに重慶に遷都した。全国の各大工場、銀行、文化機構、学校なども内地に移転した。

これから、内地は抗戦後方の中心になる。我々中国人の一人ひとりの視線は、内地に集中している<sup>11</sup>」と書いてあるように、内地の戦略的な重要性を示している。中には、「時事問題」、「内地論壇」、「最近西遷交通紀要」、「各地通信」、「作家の声」、「内地教育」、「民間文学」、「書簡往来」といった欄が設けられている。文章中には、「内地に行くための幾つかの先決問題」、「内地開発と失業救済」、「四川——新中国の発祥地」、「昆明の衣食住」、「熱血青年は延安にいる」、「晋南の民間生活」など内地の生活情報が掲載されており、内地の状況を広く知り渡らせる意図が読み取れる。これらの豊富な情報は、上海人に彼らが行ったことのない内地を紹介し、当地の風土と人情を描き、それによって上海の青年を引きつけるものであった。

こうした動員が盛んに行われた一方、想定外のさまざまな状況が生まれていたようである。例えば、ある内地に渡った文芸公演団体の生活は苦しく、賃金もなく、持ちこたえられない脅威に直面していた<sup>12</sup>。ある人は逆にこれを商機と捉え、上海で中古映画のフィルムや上映設備を購入して昆明で映画を上映し、チケット代を稼いだ<sup>13</sup>。さらに多くの人々は、喜び勇んで内地に行ったがすることもなく、寄り道もなく、しばらく内地に留まった後、また転々と上海に戻ってきた。これらの青年は必ずしも明確な目的を持っているわけではなく、ただ苦悶する「孤島」上海での生活から逃れようとしていた。このような例は新聞・雑誌の投書に散見されたが、一方で新聞・雑誌は「内地熱」の温度を下げる必要に迫られた。彼らは青年に、盲目的に内地に赴くのではなく、十分な計画を立てなければならないと告げ、また、内地に行けなくても悩む必要はなく、上海でも同様に救国の仕事ができると勧告した。

このように、1938～1939年において、内地に行くべきかどうか、いかに内地に行くべきかについては非常に多くの議論が交わされていた。顔濱の内地に対する憧れがいつから芽生えたのかは確認できないが、この時期の宣伝に影響を受けたことは間違いないだろう。そしてそれは彼の心の中で、「内地に行く」というその後数年にわたる彼の願いに育っていった。一方、顔濱日記とほぼ同時期に、汪精衛政権は青年を対象にして政治動員を行っていた。1942～1944年、汪政権は「新国民運動」を唱え、都市青年を組織し人心を丸め込む努力をしていた。華北「新民会」による動員がその一例であった。その動員の内容は、都市の生活に慣れ親しんだ知識青年たちに、都市の生活から離れ、農村で新民会の民衆工作に協力する役割も担わせようとしたのであり<sup>14</sup>、1938～1939年の「孤島」上海における青年動員とほぼ一致する。しかし顔濱日記には、この汪政権下の動員については全く触れていない。同時代の青年動員より、彼が常に三、四年前の「内地に行こう」というスローガンを言及していることから、彼の政治的立場、すなわち汪精衛政権の対日協力の姿勢への抵抗を窺える。

### 3. 顔濱の「内地夢」

1942年1月5日、顔濱は日記で初めて内地への憧れを表した。

「内地に行こう！」という願望は、長い間、自分の中に潜んでいる<sup>15</sup>。

この日、顔濱は知人の張君が内地に勉強しに行くという情報を知った。内地への願望がなぜその時に「自分の中に潜んでいる」と自覚されたのかは定かではないが、「長い間」という表現から見ると、顔濱は1938～1939年の新聞・雑誌の宣伝から影響を受けており、この時の張君の「内地行」に心を打たれたことがきっかけにかかっていると考えて良いであろう。

その後、特に1942年、「内地に行く」という表現が顔濱の日記にしばしば登場する。知人が勉強あるいは仕事のために内地に行くと、そのたびに彼は逐一記録をつけ、日記の中で彼らに対する敬意を表した。1942年1月21日、女友達が間もなく内地に行って軍隊に入るという知らせを聞いた。「頑固で古い農村で、志のある青年たちに呼びかけ、彼らを最も意義ある仕事に従事させた」。顔濱は言葉をひそめているが、これらの女子学生が内地の青年たちを動員して抗日・救国の工作に参加させていたことが窺える。このことは顔濱に「慚愧に堪えない」と感じさせ、「私も一日も早く無意味な生活から脱して、自分の新たな生を求めたい」と思わせた<sup>16</sup>。1942年1月28日、親戚が無線電信科の試験に合格して四川へ進学しに行く聞き、顔濱はまた羨望の念を抱いた。彼は「私も翼が欲しい。『封神演義』に登場する雷震子<sup>17</sup>のように、この孤島の檻から飛び出していきたい<sup>18</sup>」と書いた。これらの知人の「内地行」に対して顔濱はうらやましく思っていたのである。彼らの「内地行」について書きながら、顔濱は自身の愛国の情熱を奮い立たせる一方、いつまでも孤島に身を置いていることから孤独を感じていた。1942年3月5日、顔濱は以下のように書いている。

私は孤独を感じた。海に漂う一葉の扁舟のようで、大陸も東西南北もわからず、目標もなく、ただ前に進んでいくしかない。将来はどうなるのかもわからない。まるで親の愛を失った迷える子羊が、広大な砂漠を彷徨っているようだ。四方に猛獣をめぐらしたが、子羊は悲鳴をあげるしかない。慈愛に満ちた救い主がこの小さな命を救ってくれることを願う。新しい刺激が欲しいが、しかし勇気がない。私の将来はどうなるのだろう<sup>19</sup>。

親を失った迷える子羊であれ、海に漂う一葉の扁舟であれ、これらの喩えはいずれも祖国との分離を語っており、個人の焦慮をも語っている。そこで彼が語っ

た「孤独」とは、「内地＝祖国」と切り離された状況下に生まれた感覚であり、「亡国の民」のような感覚であろう。数日後、彼は再び自らの孤独感を以下のように述べている。

孤独な私だけが残されて、相変わらずこの無意識の生活を過ごしている。このような生活が嫌い。何か大きな変化が起こったらいいな<sup>20</sup>。

いくつかの友人の存在は、顔濱に自分が常に上海で「無意識的」に生きていることを自覚させ、今の生活に対する自己批判を行わせた。また「新生活を求める」という表現から、顔濱がそれまでの上海生活を全般的に否定したがったことがわかる。「我々青年の模範」「無意識の境遇」「新生を求めたい」といったいわば自省の念が同じ文面の中で、愛国の趣旨とともに語られている。青年の社会参加、自己実現と帰属意識、青年としての生き方などが言及されたことは、顔濱にとって青年はどうあるべきか、そして当時の社会はどのような青年を求めていたのか、といったナショナリズム以外の問題にも関わってくるであろう。すなわち、顔濱の上海で生活続けることに対する不満の裏に、自己実現が達成できないという個人の苦悩がある。彼の目には、上海は「牢獄」のようにしか見えないし、そこでの日々は「無意識の生活」であった。これらの記述における内地は、身近な他者がその想起のきっかけとなっている。明確な抗日・愛国の心情が容易に読み取れるが、顔濱の「理想の自己像」の存在も確認された。この理想像に接近するには内地に行くしかないとの時彼は考えていた。

生活が続けるため、顔濱は時に「罪悪感を覚える仕事」に従事しなければならない。1942年から金物は統制物資になったため、通常の商品の取引が禁止され、闇市での商品の取引が盛んになっていた。顔濱は丸加洋行を通して、日中合弁による国民政府の特殊法人である華中水電株式会社から元泰の鋼板を転売し、元泰の責任者として代金を受取ったことがある。その日、彼は鋼板の詰め込みと包装をしながら心の中が罪悪感で満たされ、以下のように述べている。

私はこれらの貨物を破壊したくてたまらない。しかしそうする勇気がない。私は国に申し訳ない！私は民族に申し訳ない！無数の手が私たちに責めているのを見たかのように、無数の敵が私たちの提供した原料で製造された武器を手に持ち、我々の同胞を殺しているのを見たかのように……そして無数の怨霊が私たちの後について来ているのを見たかのように。私は怖くてこれ以上考えることはできない。私は本当にこの世の中の罪人だ。その時、私はすでに孤島を離れることを決めて、年始の利益配当をもらったならこの計画を実

施しようと考えていた<sup>21</sup>。

包装を終えた後、ある「三青团員」と名乗る人物が元泰を訪れ抵抗的な冊子を残していき、顔濱の「被占領意識」を呼び起こした。この青年は「三青团」のバッジを取り出し、顔濱に憧れを抱かせた。同日に起こったこの2つの出来事は、顔濱に大きな衝撃を与えた。「孤島を離れようと決心した」と書いた顔濱は、結局「年始の利益配当」を待たなければならないため見送ることになった<sup>22</sup>。

またある時には、内地は彼の苦悩の解毒剤として機能したようだ。寧波にいる顔濱の継母は彼に何度も手紙を書き、経済的困難を訴え、彼を困惑させた。彼は日記の中で、「私はすべてを捨てて内地に行き、新鮮な空気を吸いたい」と書いている。

顔濱が使った「無意識」「新生」といった言葉は、「五・四」時期の青年によく使われた流行語である。王汎森によると、意識の有無で「進歩青年」とそうではない人が二分された<sup>23</sup>。「無意識的とは、旧習を守り、時代遅れということである。それとは逆に、意識的とは、反省的、批判的で、理性を運用する、理想的なのである<sup>24</sup>」。また、「無意識」はよく「新生活」という流行語とセットで登場する。胡適は「新生活」という文章の中で、「どのような生活が新生活と言えるだろう。考えてみると、新生活は意識的な生活なのだ」と述べている。つまり、意識的な生活と新生活は密接に関わっている。胡適は以下のように説明している。

みなさんがもし、「なぜこうするのか」と答えられないなら、無意識に生活しているということだ。逆に言えば、「なぜこうするのか」と答えられるのであれば、意識的に生活していると言えよう。中国人に意識的な新しい生活をしてほしい。実際、新しい生活は難しくない。常に自分に「なぜこうするのか、なぜそうしないのか」を聞くだけでいい<sup>25</sup>。

顔濱現在の生活が「無意識」であると自称することは、実際にはある種の「正しい生活」が強く意識されていることに由来するであろう。理想と現実の境界線をごまかすために「無意識」という言葉が使われたのでおり、現実が否定の対象になった瞬間、その現実に含まれた「自分」が批判の対象となった。「新生」を求めたい顔濱は、否定されるべき現在から逃げようとした。

内地は一つの確実な「出口」になったようで、現在から逃れ、新たな生を求める方法になった。「内地に行く」ことも目的ではなくなり、一つの方向に変わった。それは上海以外のどこかを指している。

## 第2節 上海を離れる

### 1. 生活難の脅威

1944年に入り、生活に余裕のない顔濱は買いだめや転売の雑用に追われたため、内地という言葉は長らく日記に登場しなかった。彼が再び内地に言及したのは、1945年1月のことであった。その日、顔濱が道を歩いていると、上海の愛国団体が貼ったポスターが目にとまった。「近く上海は大量の爆撃にさらされ戦場となる可能性がある。市民がいち早く上海を離れることを願う」との内容であった。米軍の上海空襲は1944年7月からはじめたが、早期の空襲はほとんど上海郊外と浦江にある日本軍の軍用施設を目標とするものであり、市民の生活にそれほど大きな影響を及ぼさなかった。しかし1944年末になると、漢口が米軍の空襲で廃墟と化したといううわさが素早く伝わり、上海全市に広がって市民を不安に陥らせた。顔濱は日記でこれらの情勢を記し、愛国団体の「避難警告」に対して以下のように感想を述べた。

確かに、これは決して恐喝ではない。少しでも思考力のある人は、おそらくずっと前からこの状況を予測してきた。先覚者と愛国者たちは続々と内地に行ったのに対して、上海に残留した人々は、敵に利用されており、今でもこの危地を抜け出すことを考えている。私もその中の一員だ。しかし、私はどこへ行くべきだろう。内地には親戚も知人もいないし、特別な技能も持っていないから、いかにそこで生き残れるだろうか。

ここで彼は久しぶりに内地の話を持ち出したが、彼の口調にはかつてのような快活さはなく、将来への見識のない自分の悔しさだけを表している。すでに内地に行った「先覚者」と「愛国者」に比べて、顔濱は上海を離れなかったことに後悔し、自分の短見を自覚した。その後彼は友人と相談し、「何かあれば、とにかく帰郷して進路を考えるしかない<sup>26</sup>」という結論を出した。これは顔濱がはじめて上海を離れる計画を着実な実施に向けて考えたものである。

その後、日記には上海を離れた身近な親戚や友人の記録が多く出てくるようになった。元泰は店じまいを控え、家族を持つ職員たちは相次いで帰郷した。特に彼が毎晩行っていた第四中華職業補習学校も1945年5月に閉校に追い込まれ、毎晩わずか1時間の学校生活も奪われてしまった。学校生活で得られた「平穩」な日常感覚は顔濱の「上海残留」の日々を支えてきたのであり、その生活の終焉から彼はある種の喪失感を覚えるようになった<sup>27</sup>。夜学の同窓も次々と上海を離れ、目的地は北平、杭州、常州などだった。これらの地域が日本軍の占領下にあった

にもかかわらず、顔濱は彼らの上海からの離脱を羨ましがっていた。それに対し顔濱は離れたくても離れられない状況のなかで、自分の優柔不断さを恨んだ。

加えて、物価の急騰で上海がさらに住みにくくなった。1945年6月、顔濱は友人と米価の急騰について話しあい、「今すぐ上海を離れて自由区に行くことができれば、実に最上の方策なのだ」とした。しかし、形勢が深刻になった1945年、旅費、交通、安全など様々な困難のため、上海を離れて避難することがそれ以前よりさらに困難になった。空襲の脅威や物価の高騰など生活難によって、上海を離れることを本格的に計画しようとした顔濱も旅費不足のため、「座して死を待つか、それとも危ない道を渡るのか…どうすれば良いのかわからない<sup>28</sup>」と迷った。

## 2. 「内地行」の試み

生活難に背中を押された状況下で、顔濱の友人夏禹涛からの「内地に行こう」という提案が一つの転機として現れた。そこで顔濱の念願の「内地行」もようやく可能になった。1945年5月22日、顔濱は友人の夏禹涛から手紙を受け取った。夏禹涛は間もなく杭州を離れて内地に向かうと言い、その目的地は竜泉であった。夏禹涛は「内地では人材が必要で就職が容易であり、もし顔濱も内地に行く意向があれば教えるよう」顔濱を誘った。顔濱は夏禹涛の意志と度胸に感心し、また相手がこれほどまでに自分を重視してくれたことに感動した。顔濱は、友人にとって自分は「非凡な青年であるのだ」と信じた。ここ数年の彼は何もせず上海で安住していた顔濱は、「夏君の偉大さは私の凡庸を引き立てている」と書きながら、「内地に行く」ことを通して、この凡庸な人生からすぐさま脱出できるかもしれないと予感した。

その晩彼は友人と福西路から八仙橋まで、また霞飛路まで散歩した。顔濱はその日を「ここ数日間の比較的楽しい一日」と思いながら、「上海、私は確かに飽きるほど住んでもう思い残すほどのものはない。『さらば、大上海!』と言える日が早く来るように<sup>29</sup>」と書いた。比較的楽しい一日だったが、彼は名状し難い空虚を感じている。数日後、夏禹涛から確実な返事を得て、顔濱はようやく上海を離れることを決めた。出発前夜の6月14日、彼は以下のように書いている。

一人前の男は風に乗り波を割って進むべきだ。私はとても興奮していて、すぐに他の同志に会いたくてたまらない。数年来の念願で、もし本当に成功することができれば、やはり気持ちが晴れ晴れすることだろう。すぐに「さらば、憎らしい大上海」と言えるように<sup>30</sup>！

出発の日、顔濱は家族と友人に別れを告げ、人生の新たな段階を迎えることに

心の準備を十分にしたが、それは結局成功には至らなかった。二日後、彼は「私はまだここに座って日記を書いているとは思わなかった」という一言を冒頭にして、次のように述べている。

私と夏君以外、ほか同行者は旅費を全く準備していない。また、王という人が私の指輪を借りたがった。それに、リードしてくれる人は胡宗南の部下だと自称したが、詳しい話を聞かれると言葉を濁して、話が前後一致しない。しかも、目的地に着いてから、決まった仕事あるいは目的が全くない。たくさんの疑問点が湧いてきたが、それでも私は上海を離れたい<sup>31</sup>。

結局、周りの人に行かないように勧められた顔濱は、「私は、また、この孤島に残るという判決を下された<sup>32</sup>」嘆いた。その翌日、彼は「ぼんやりとした<sup>33</sup>」一日を過ごした。友人の夏禹濤がすでに上海を離れてしまったのではないかと思いつながら、彼は心が何とも言えない気持ちで満たされた。この度の内遷の失敗を記録した日記は、「内地」への思いが言及された最後の日記である。その後、彼は内地の話をしなくなり、断念してしまったようである。

劇的でありながら現実的なことに、詐欺の疑いが強いということで彼の計画は頓挫した。しかしそれより興味深いのは、顔濱が日記の中で終始それを「内地に行く」ことと称することである。前文で考察したように、地理上の内地とは武漢、重慶、昆明、貴陽、桂林をはじめとする中国西南部の地域である。しかし、顔濱の目的地は河南省の許昌であり、1945年6月の時点ではすでに日本軍の占領下にあった。つまりこの目的地は、地理上の内地でもなければ「正真正銘の中国」という意味での非占領地としての内地でもない。ここで浮かび上がってきたのは、顔濱の目的が内地に行くことよりも「上海を離れる」ことにあったということである。

### 第3節 道徳的焦慮から「逃げる」

#### 1. 「残留者」への批判

顔濱の焦慮の根源を探るため、その時期の社会がどのような青年を期待し、どのような青年を非難していたのかという問題にまず触れたい。一部の人の内遷により、もともと上海「在住」の人々は上海に「残留」した人々が変わった。この「残留」という言葉には、内地と上海の政治的な対立関係および上海市民への非難が内包されている。1939年3月21日の『申報』に掲載された「彼」という文章を見てみよう。

彼のような者でも「救亡青年」の一員だと言えよう。〔中略〕三ヶ月前から「内地に行こう！」と声高に叫んでいたのに、結局行かなかった。行かない理由は、母が許してくれない、旅費が不十分、同行者がいないなど、様々であった。しかし最近、死灰復燃のように、彼は再び「私は必ず内地に行く！このままだと私の意気が消沈してしまうから」と叫んでいる。〔中略〕しかし、時間が経っても、彼はまだここにいる。「まだ内地に行っていないの？」と聞かれたら、彼は「もう行かない。上海にいても仕事がいっぱいあるから。例えば、一時間後、私は一つの読書会に行かないといけない。その次にもう一つの文芸座談会がある」と答えた<sup>34</sup>。

『申報』に掲載された文章「彼」は、「内地に行こう」と叫ぶだけで実際の行動を取らない人々に対する揶揄である。しかし同時に、この青年が進退極まる苦境に陥ったこともまた間違いない。「母が許してくれない、旅費が不十分、同行者がいない」など「彼」の理由は、当時内地に行こうとする有志青年が直面する現実的な問題の一側面を示していた。それに加えて「彼」という題目は、自己矛盾に陥った人が多数で一般的に存在しているという意味合いを伝えているであろう。

このように「内地に行こう」という呼びかけの裏には、上海および上海「残留者」への非難が含まれた事例が多く見られる。例えば、1938年の雑誌『世風半月刊』に掲載された文章「有望な青年は内地に行こう」は以下のように述べている。

そもそも正真正銘の中国は内地でしかない。今は沿海部が陥落し、中国は肉体がもはやなくなっており、靈魂しか残っていない。しかし、それは一つの覚醒した靈魂なのだ。〔中略〕内地に行かず、上海——この孤島、死島、魔島——に残るのは、静かに最後の勝利を待つと言えるのか？言えないだろう！中国のために考えてほしい。青年はどのような理由で上海で安逸な生活を送れるのであろう<sup>35</sup>。

「内地に行こう」に賛同する救国活動家からすると、上海の青年も祖国と同じ運命を共有すべきであり、「静かに勝利を待つ」という態度は「降伏」の詭弁のようにしか見えない。彼らは「孤島」である上海を「死島」「魔島」と呼び、上海に残って生活することは「間違っている」とした<sup>36</sup>。上海市民の日常生活は価値判断を強いられ、「正しい生活」と「間違った生活」に二分された。これと似たような論調は同時代の新聞と雑誌に散見される。雑誌『上海婦女』の「内地に行くか、それとも上海に残るか」という文章は、さらに消費活動の角度から「残留」

を対日協力と同一視した。以下一部引用する。

私たちのすべての生活用品は、海外輸入品であっても、国内輸入品であっても、ある特殊な勢力の統制によって税を取られている。そのため、上海で消費することは、経済の面で特殊な勢力に協力することになる<sup>37</sup>。

つまり上海での消費活動は税収によって日本軍を援助することになるという主張である。このような過激な非難は生活そのものを全般的に否定するものであり、上海で生きているだけで有罪だという判断に繋がる。このように上海は、内地を英雄的な概念としてその対極に位置する政治的裏切りや道徳的墮落の現場として描かれてきた。その意味で、安逸・享樂的生活を内包する上海は本当の中国ではなく、内地こそ「正真正銘の中国」の象徴として位置付けられている。また、内地に行くことは「正義」と直接に結びつくことであり、逆に上海に残留することは国難を看過すること、さらに言えば日本に協力することと認識されるようになった。それと同時に、この「道徳的墮落の現場」に安住し、抗日・救国の運動に参加しない上海青年は「感覚の享樂におぼれ、自分自身を麻痺させる<sup>38</sup>」人々として描かれ、不徳なイメージを与えられた。読者の声を聞かせる新聞・雑誌に設けられた「読者信箱」欄に注目してみよう。ある西北の女性は新聞投書で以下のよう述べている。

二十世紀生まれの女子は、弱虫ではない。もちろん、モダンガールたちは内地に行きたくないだろう。しかし、我々内地に行くとは志願した女性の体格は、男子に比べて劣っていないことに自信がある。我々西北の女性と上海の御曹子と比べてみると、後者が恥をかくのだろう<sup>39</sup>。

「二十世紀生まれ」とは、投稿者である西北の女性の自身は「進歩青年」だという自己意識を表している。その意味で投稿者が言う「先進」とは、上海男女の「モダン」とは異なったものであり、むしろ対立しているものである。そこで豊かで穏やかな生活に未練を持ち、救国に無関心の上海男女に対する軽蔑を見せている。しかし興味深いのは、この西北の女性の非難の矛先が全国の青年ではなく、上海男女だけに向けられた点である。ここに上海と西北の対立、強いて言えば、「上海」と「上海以外」の対立という問題が浮上している。

同時期の小説においてもこのような上海の特殊性が語られている。上海の作家が描いた内地像は、「遼遠な、疎外な、洋館やダンスホールもなく、卑屈にへり

くだる奴僕もいない原野<sup>40</sup>」のようなものである。すなわち内地は、日本に占領されていない正真正銘の中国として認識されると同時に、「近代」に未だに汚されていない「ふるさと」として上海の作家に想像されていた。対して都会としての大上海では、上海市民が「無意識に使い慣れた広々とした洋室、アスファルト道路、水洗トイレ」といった列強の侵略に伴ってもたらされたモダンの痕跡が、屈辱的な事象として想起されたのである。特に租界に住み近代化という侵略の遺産を喜んで受け止めた市民にとっては、日本軍の侵略はかつての列強侵略の記憶を喚起させるものであり、それによって上海で生活をする現在が「間違っている」ものであると自覚されたのであろう。

「内地に行こう」というスローガンは抗日・救国を目的とする動員である一方、内地の描き方には上海に対する非難が含まれている。このような都会生活への否定は内地と上海の矛盾というより、むしろ新旧が混ざり合う近代中国の様々な場面に内在する矛盾だと言えよう。「新」を代表する上海に残留した／せざるを得なかった市民に対する非難は、まさにこの矛盾を顕在化した一例である。このような厳しい空気の中に、上海「残留者」に当てはまる顔濱は自らの生活が「非道徳的」ではないかと疑ってしまった。

## 2. 「活路」としての内地

抗日・救国運動の情熱の中で、苦痛と疎外の感情は急速に内地へいけない上海青年の中に蔓延していった。彼らは国を救おうとしたが、その方法がないことに焦りを感じた。内地に行きたくても行けない上海青年が新聞・雑誌社に投書し、似たような苦悶を訴えていた。彼らは内地に行く路線を尋ねたり、現実的な困難を打ち明けたり、編集者に「人生の方向性」を教えてもらうものまであった。つまり、内地に行くかどうかということは、もはや地理的な移動ではなく、岐路にたった青年の人生の選択に関わる問題になった。知識青年であることを自認していた顔濱も、彼らと似たような焦燥感を共有していた。

残留という状態から生まれた憂鬱に苦しめられた結果、「内地に行けなかったら自殺するしかない」と投書したものである<sup>41</sup>。さらに憂鬱を超えて本当に自殺にまで至った人もいた。ある青年は軍隊に志願する思いを親に表明したが激怒され、外出まで禁止されてしまったため、刀で自刎した<sup>42</sup>。こうした内地に行けなくて自殺する、あるいは親と反目する事例は、当時の新聞や雑誌でしばしば見られる。

これらの多くの投書では、内地に行く動機が「上海での苦悶」として表現されている。このような青年の苦悶を上海の作家たちがとらえ、小説の素材にした。上海の雑誌『万象』を研究する申東順は、『万象』に登場した上海青年の「内地夢」

をテーマとする小説について以下のように述べている。

内地に行くことは、精神的苦境を脱する唯一の道になった。興味深いことに、『万象』の作者は青年たちが内地に行く前の精神的な苦悶と社会闘争に重点を置いて描いているが、いったん青年たちが上海を離れることを決心すると、ストーリーが突然終わる。つまり、内地事情に関する描写はほとんどない。これは当時の政治情勢と関わっているだろうが、作者が意図的に内地の現実を避けたいという理由も考えられる。すなわち内地は、一つの「理想世界」、現実世界の対立物として存在しており、作者の批判意識と理想を託すところである<sup>43</sup>。

これらのストーリーの中で、一人一人の青年が「無意識」の生活から目を覚ました。彼らは「旧」生活から離れ、「新」生活を求め探すために内地に行った。一方、このように内地に行った後の事情をあえて空白のままにすることによって、地理的な内地の現実が薄められてしまうが、その代わりに象徴としての「ユートピア的内地」が成立する。内地へのあこがれには、都市青年の愛国意識が込められている一方、封建的な家庭と決別し、現実生活の牢獄から抜け出し、個人の自由・解放を獲得するという意味も含まれている。

顔濱の目的地は前述の意味における内地ではなく、許昌である。しかし、目的地を問わずとにかく「行く」、という現実の行動を通して、顔濱は彼の理想の自己像に近づこうとした。つまりここでは、「内地に行こう」という言葉が受け手に能動的に使用され、日常行動にある種の価値と意義を与えるテキストとして語られたのである。つまり、顔濱は避難という受動的な行為に、抗日・救国という積極的な意義を与えようとしたのである。王汎森が指摘したように、戦時期に生きた苦悶の青年たちにとって、「主義」とは単なる「上から」の概念ではなく、青年たちの実生活にも応用されるものであり、青年の一つの精神的拠り所となっていた<sup>44</sup>。このように顔濱を含めた青年たちは「内地」という象徴を借用し、自らの生活の処方箋としている。恋愛や家庭関係における矛盾を「旧」の生活とみなし、それと決別するには内地に行くしかない。このように、内地に行くことの内実が変容し、政治の生活領域への侵入とともに、生活が政治を柔軟に受け止めることで、政治（内地に行くこと）を新たな形で呈した。これにより、重慶、昆明、武漢など地理上の内地は重要ではなくなったのである。内地は苦悶の上海残留者の到達できない夢として立ち上がった。「内地行き」の失敗で上海に「監禁」されたにもかかわらず、内地の夢を見た瞬間、顔濱は平凡な人生から一時的に「解放」された。

### 3. 終わらない「孤島」感覚

そもそも上海の「孤島期」とは、1938年の第二次上海事変から1941年12月に太平洋戦争が勃発し、共同租界とフランス租界が日本軍に接収されるまでの4年間のことである。アジア・太平洋戦争の勃発とともに日本軍が上海租界に進駐して全面的占領がはじまり、「孤島期」は終結を迎えた。しかし顔濱日記において顔濱は、1942年以後の上海を呼ぶ際に、相変わらず「孤島」という表現を多く使った。例えば、『封神演義』に登場する雷震子のように、この孤島の檻から飛び出していきたい<sup>45</sup>、「烈士に土下座し、孤島にいる私の罪を償いたい<sup>46</sup>」、「社会は有為の青年を期待している。しかし孤島で屈辱に堪えて生きている私は何もできない<sup>47</sup>」などの記述がある。特に内地に言及するときには、上海を内地から「孤立した島」として表現していた。つまり顔濱にとって、陥落した上海と内地は一体のものではなく、むしろ別々のものとして実感されていたのである。彼のこのような「孤立」した、ある種の共同体から排除された感覚は、日本軍の租界進駐によっても解消されることはなかった。上海の「孤島期」が終わったにもかかわらず、上海青年の顔濱の「孤島」感覚は終わらなかったのである。

けれどもこのような「孤島」感覚を生み出したのは、顔濱のやむをえない「残留」という選択であった。「内地に行こう」という世論の雰囲気呑み込まれた顔濱は、内地に行けないことを彼自身の責任、ひいては罪であるかのように思ってしまった。内地に行かないことで「祖国を捨てた」ことになった彼は、結局「祖国に捨てられた」結末を迎え、それは自業自得のこととしか捉えようがなかったのである。そこで生まれた内地に行けない自分の無能さに対する焦慮は、彼をさらに苦しめた。内地とは対立する場所であるかのようなイメージのあった上海では、顔濱のように救国を自分の責務であると思いながらも、やむをえない事情により上海に残った青年もいた。能動的に「内地行」を挑戦し、失敗した後、顔濱は一日も早く「孤島」から解放され、自らの「残留」状態を終わらせ、祖国に戻らせる外部の力を望むようになった。

このような「孤島」感覚は、ミクロな角度から上海という町の異質性を表している。それは、占領以前の日本軍に囲まれた状況から、占領後の祖国から切り離された状況に至るまで、常に存在していた。そこに近代上海とは何かという答え難い問題が存在する。田中貢太郎は「上海は決してシナではない。骨髓に争われないところはあるが、血肉は英国がもち、爪髪衣帽は日国、美国、法国その他世界の各国がもつ、結局世界のどこにも属さない都市である」としたのに対して、平野純は「にもかかわらず上海は中国なのだ<sup>48</sup>」と返答し、上海と中国の「つかず離れず」の関係を表している。上海は、南京条約により開港した後、東西文明が異様に入り混じった不思議な街であり、日中戦争後は租界の庇護下にある安楽

の地でもあり、アジア・太平洋戦争以降の日本占領下の「孤島」でもあった。したがって上海の市民は開港以来、歴代の政権交代を経るなかで自らの人生を翻弄されていたのであり、それゆえに「孤島感」から自由になることはできなかった。近代化が一步先を進んで、内地を「捨てた」上海は、抗日・救国のイデオロギーの文脈においては「捨てられた側」になってしまったと言えよう。このような逆転関係にありながら、上海、あるいは上海人は、いずれにも「なじめない」という感覚を常に有していた。この感覚はさらに日本軍の上海占領というきっかけでさらに顕在化し、顔濱のような「自覚を持つ青年」のアイデンティティの混乱を招き、上海と「内地＝祖国」の乖離を深めた。このような乖離によって、顔濱は上海で「残留」だけで良心の呵責を受けるようになった。結局、彼は「内地に行こう」という政治スローガンを日常生活の実践として解釈し、自らの解脱を完成させようとした。

## おわりに

1945年終戦直後、国民党政府（蒋介石政権）は重慶から南京に戻ってきた。還都の喜びとほとんど同時に進行したのは、上海市民に対する非難であった。つまり「上海に残る」ことは、日本の支配への服従、さらには協力に等しい行為だとみなされるようになった。また、「大後方」から戻ってきた人には上海市民を見下す傾向が見られ、「小生は重慶から飛んできたのですが」と自己開示しながら優越感に浸ることが多い。このような現象について知識人の傅雷は、「收復区<sup>49</sup>には全て過去2ヶ月間、『偽』のタイトルが冠されていた。過去8年間華北、華南、華中の大地を照らしつづけた太陽でさえ、浦江の水ですら『偽』の空気に染まってしまう、『附逆』の疑惑に包まれているようだ<sup>50</sup>」と風刺した。顔濱の友人も国民党交通部の接收工作員に「偽学生」と認定され、それにより大学の受験資格が剥奪され、顔濱に憤慨と困惑を抱かせた。本研究では、この上海「残留者」に対する偏見の前史ともいえる「内地に行こう」を掲げた動員および動員される側の道徳的焦慮を考察した。

第二次上海事変後、国民党軍が重慶に撤退すると、上海に「在住」していた人々が上海に「残留」した人々が変わった。上海では「内地に行こう」というスローガンが流行し、その内容は、上海の有志青年が内地に赴き、農民を動員して前線を支援することをめざすものであった。このスローガンは日本占領下の上海では姿を消したが、顔濱日記においてはたびたび登場した。「知識青年」であることを自認していた顔濱は、常に「残留」という不徳なアイデンティティとの決別を求めている。彼は内地に行くことを望み、彼の「偉大なる理想」を実現させ、上

海での「無意識」的な生活から逃れようとした。

しかし、上海を離れるために計画していた顔濱の最終的な目的地は、重慶や非陥落区をはじめとする内地ではなく、すでに陥落していた許昌であった。にもかかわらず顔濱は今回の移動を「内地に行く」と表現していた。このことは、日常生活における顔濱の政治を物語っている。理想的な青年像に接近するため、顔濱にとって「内地に行こう」というスローガンは、単に抗日・救亡のそれであるだけでなく、焦慮から逃げる方向性を示すものでもあった。顔濱の「内地夢」が実現できなかったにもかかわらず、個人の焦慮を政治的に語ることで、彼は自分を平凡な状況から救い出したのである。

注

- 1 古厩忠夫『日中戦争と上海、そして私——古厩忠夫中国近現代史論集』研文出版、2004年。
- 2 モーリス・アルプヴァックス著、畢然、郭金華訳『論集體記憶』上海人民出版社、2002年、283-284頁。
- 3 Bolger, N., A. Davis, E. Rafaeli, 2003, "Diary Methods: Capturing Life as It is Lived", Annual Review of Psychology, 54 (1) .
- 4 「蒋介石為南京淪陷告全国同胞書」『四川省政府公報』第102期、1937年12月16日。
- 5 陳毅「怎樣開展內地的救亡運動」『和平！奮鬥！救中国！』長江書店、1937年6月。
- 6 柳乃夫「怎樣展開内地工作」『文化戦線』第7期、上海編輯人協會、1937年11月。
- 7 石礎『怎樣做内地工作』黑白叢書社、1937年12月。
- 8 陳存仁『抗戰時代生活史』廣西師範大學出版社、2007年、47～49頁。
- 9 石川照子、高綱博文『戦時上海のメディア』研文出版、2016年。
- 10 『申報』1938年10月14日。
- 11 『内地』創刊号、内地雜誌社、1938年12月。
- 12 暮春「「關於到内地去還是留在上海？」特輯：到内地去！」青年知識、第1卷第9期、1940年。
- 13 曾迭「上海人到内地去」『自由譚』1939年第5期。
- 14 菊地俊介「日本占領下華北における新民会の「青年読物」」『現代中国研究』第34号、2015年3月、4～24頁。
- 15 顔濱日記1942年1月5日付。
- 16 顔濱日記1942年1月21日付。
- 17 『封神演義』では、背中に翼を生やす半人半鳥の人物として描写されている。
- 18 顔濱日記1942年1月28日付。
- 19 顔濱日記1942年3月5日付。
- 20 顔濱日記1942年3月12日付。
- 21 顔濱日記1942年2月10日付。
- 22 顔濱日記1942年2月10日付。
- 23 胡適「新生活」『胡適文選』1919年。
- 24 王汎森『思想は生活的一种方式：中国近代思想史の再思考』北京大学出版社、2018年。
- 25 胡適「新生活」『胡適文選』1919年。
- 26 顔濱日記1945年1月6日付。
- 27 劉韻琿「戦時下の「平穩な日常」——上海の一青年の夜間学校生活（1942～1945）」『同志社グローバル・スタディーズ』第10号、137～154頁。
- 28 顔濱日記1945年6月11日付。
- 29 顔濱日記1945年5月27日付。
- 30 顔濱日記1945年6月14日付。
- 31 顔濱日記1945年6月17日付。
- 32 顔濱日記1945年6月17日付。
- 33 顔濱日記1945年6月18日付。
- 34 『申報』1939年3月21日付。
- 35 緑君「有希望的中国青年到内地去!」『世風半月刊』1938年、第5期。
- 36 同前掲。
- 37 姜平「到内地去還是留在上海」『上海婦女』1938年、第1卷第7期。
- 38 雪霖「隨筆：到内地去」『今日之教育』1938年、第3期。
- 39 『申報』1939年9月20日付。
- 40 申東順『在「説」與「不説」之間』中国伝媒大学出版社、2012年、265頁。
- 41 同前掲。
- 42 『申報』1938年11月1日付。

- 43 申東順、前掲。
- 44 王汎森、前掲。
- 45 顔濱日記1942年1月28日付。
- 46 顔濱日記1942年2月9日付。
- 47 顔濱日記1942年7月7日付。
- 48 平野純『上海コレクション』筑摩書房、1991年、11、384、390頁。
- 49 解放後、日本軍から取り返した領土。旧占領地。
- 50 傅雷著、傅敏編『傅雷文集』上海遠東出版社、2016年。

**Abstract**

# Those Who Have Not Been Able to ‘Go to the Inland’

The Anxiety and Liberation of A Shanghai Youth  
(1942~1945)

Liu Yuncheng

After the Battle of Songhu (1938), newspapers and magazines in Shanghai actively promoted the slogan ‘go to the Inland’ in order to mobilize young people to participate in the supporting work of resisting Japan and saving the country. Their main job is to mobilize farmers in the inland to support the frontline battle.

It can be said that the slogan ‘go to the inland’ itself is a political symbol. However, the question of how the slogan was accepted by the Shanghai people and how it was put into practice has not yet been sufficiently discussed. This study uses the diary of a young man who was living in Shanghai as a clue to try to analyze the response of the Shanghai people to this slogan, and also try to figure out whether the image of the ‘inland’ has been reproduced in the process of the slogan’s acceptance.

The diary of the young man called Yan Bin (1923~?) was discovered and published in 2015, in which he wrote about his daily life in Shanghai under Japanese occupation during 1942~1945. Yan Bin was born in Hongtan, Ningbo City in Zhejiang Province. He lost his mother at an early age and moved to Shanghai with his sister at the age of 14 (1937). After graduating from junior high school, he became a craftsman in the hardware store. Yan Bin began to write a diary in 1942 (at the age of 19) and continued to write in the postwar 1960s. The book contains diaries from 1942 to 1945 (missing in 1943), with a total of approximately 400,000 words. Yan Bin mentioned the slogan ‘go to the inland’ several times in his diary, which reveals his own desire for going to the inland and the dilemma of Shanghai people who ‘chose’ to stay.

This research first analyzes the historical background of this slogan. Through the content of the slogan published in newspapers and magazines, we explored

how the slogan was popularized. In the process of its popularization, the image of 'inland' has been rebuilt and changed several times. While becoming a patriotic symbol, it also indirectly criticized the people who stayed in Shanghai as the one who shows indifference to the war. Yan Bin mentioned his sense of guilt many times in his diary, which proves that the slogan has caused a certain degree of moral pressure on the people who stayed behind in Shanghai. On the other hand, as a way to dissolve moral pressure and insufficiency in daily life, Yan Bin named one of his actions to leave Shanghai as 'going to the inland'. In his diary, we can not only see the intrusion of politics into one's daily life, but also how one reassesses daily life as part of politics.